

## 第 268 回ガスクロマトグラフィー研究会

—見学会と講演会—

台風一過の8月26日(金)、新宿発9:30の“かいじ101号”の到着に合わせて、甲府駅改札前に集合、タクシー3台に分乗してサントリー登美の丘ワイナリーを訪ねた。

前日の25日には台風11号を迎え、雨模様の中、今回の見学会のお膳立てをして下さったサントリー生物有機化学研究所の小村 啓さんと、ガスクロマトグラフィー研究懇談会側でお世話下さった渡辺征夫運営委員との間で、相談を重ねた結果、苦渋の「決行する」決断をされ、参加者に伝えられた。結果は快晴という有り難い結果となった。

到着はちょうど昼時なので、予約をしていただいていたバーベキューガーデン「ワインバラソル」で、早速ワインを頂きながらバーベキューを楽しんだ。真正面に富士山が眺め、甲府盆地を下に見ての眺望は見事であり、一同、大いに満喫した。今回は総勢13人と少人数である。1週間後に迫った分析展のこともあり、会員の方々に参加の余裕が生じにくい事情もあったようだ。

13時30分から、製造課長であり、品質課長でもある棚橋博史さんから「美味しいワイン作り」と題し、登美の丘ワイナリーの紹介をしていただいた。ブドウの品種から、その健全性、熟度といったものと気象、土壌、技術といった事柄についてお話しいただいた。棚橋さんはフランスに留学して、ワインを勉強されたとのことで、ワインへの深い愛着が感じられた。

メインの講義は小村さんをお願いした。「GCによる食品香気分析」と題して、香気、味といったものを、いかにGCで扱うかといった内容をご自身の得られた成果を中心にお話しになった。最近話題のコンプリヘンシブGC×GCの活用といった成果も加えられて、示唆に富んだ、また、まだまだやることがあるといった刺激の内容でもあった。講演後の質問も活発で、終了後の懇親会でも話題は尽きなかった。

講演の後、広大な敷地のごく一部、ブドウ畑を棚橋さんの説明を聞きながら見学し、さらに工場に入って醸造過程の見学をした。このワイナリーでは、普段我々の目に付かない名称のワインが作られており、ワインセラーには2501の樽がたくさん寝かされていた。また、約20万本のワインボトルが熟成さ



れ、静かに出荷を待っていた。最後に、このワイナリーご自慢の「蔦石坂園2002」を含むワインの試飲をさせていただいた。棚橋さんの説明によると、試飲をするためのワイングラスがISOで決められているとのことで、その規格のグラスを使った。ヘッドスペースに香気成分が揮発性の高い順番に上から層をなしているの、これを順次匂いをかぎ、楽しむ。次いで、ワインをかき混ぜて口に含む。口の中のあちこちで味わった後、コップにはき出すと、きれの良さが味わえる、といった内容であった。

夕方になり、ワイナリーを後にし、甲府駅の近所での懇親会をこれも小村さんのお世話で開催し、サントリービールや芋焼酎で盛り上がり、20時過ぎに甲府を後にした。

小村さん、棚橋さんはじめ、ワイナリーの方々に大変お世話になりました。ここに記し、感謝の意を表します。

〔東京都立大学名誉教授 保母敏行〕

## 第 329 回高分子分析研究懇談会

標記例会が9月9日(金)、東京簡易保険会館「ゆうぼうと」で開催された。講演2題とワークショップ2題、計4件の発表と39名の参加者による活発な質疑応答が行われた。

講演の1件目は、長谷川 健氏(日大生産工)による「多角入射分解分光法:高分子薄膜解析への新たな取り組み」と題した内容であった。まず、ケモメトリックス法について説明があり、ケモメトリックス法を赤外分光法にうまく利用することによって、光の進行方向に平行に電場振動を持つ仮想的な光からの情報を得るというものであった。薄膜分析に適応すると、in plane 方向と out plane 方向の赤外スペクトルが同時に得られ、薄膜の分子配向等の特性解析に非常に有用であることが紹介された。

ワークショップの1件目は、渡辺健市氏(豊田合成)による「ブロックPPの構造解析と材料特性の関係」と題した内容であった。28種類のブロックポリプロピレンの一次構造分析とパルスNMRによるマクロな組成分析を行い、成形性や高次構造さらには材料特性との相関について報告がなされた。高分子の一次構造からの材料物性予測に関して非常に興味深いものであった。

ワークショップの2件目は、佐藤信之氏(東レリサーチセンター)による「ピンポイント濃縮/顕微IR法による表面微量有機物の定性・定量分析」と題した内容であった。ピンポイント濃縮/顕微IR法の原理が説明された後、定量や定性分析について直面する問題への対処法についての報告があった。溶媒(疎水、親水性溶媒)を適切に選択すること(混合溶媒の使用)やスポット体積を考慮することによって、定量と定性の両方が可能であることなどが紹介された。

講演の2件目は、五十野善信氏(長岡技科大)による「高分子・ゴムのレオロジーのキーポイント」と題した内容であった。まず、粘弾性体の微小変形のレオロジーについて数式を用いないで基礎的なところから説明があり、カーボンブラック充填天然ゴムの物性発現に及ぼすフィラー構造についてレオロジー測定から解析が可能であること、真の材料の性質を調べる

ためには大変形下でのレオロジー測定が特に重要であることなどが、たいへんわかりやすく紹介された。

〔山形大学工学部 川口正剛〕

## ◆ 理事会だより

2005年6月17日13時30分から17時40分まで本会会議室で、第3回理事会が開催された。前回の第2回理事会から澤田嗣郎先生を会長とする新体制が発足したが、第2回理事会は新旧引き継ぎを兼ねた理事会であったので、新体制メンバーのみでの理事会は今回が初めてであった。また、前回第2回理事会で紹介のあった木村宗明新事務局長にとっても、小野前事務局長がおられない状況での初めての理事会運営であり、出席理事・事務局職員にとって、新しい意気込みと少々の不安を交えた雰囲気での会議が始まった。

理事会では、報告事項29件、承認事項27件、審議事項9件の議事が提案された。議事の最初に喜ばしいこととして、本会会員である池田長生先生（元筑波大学教授）が春の叙勲で瑞宝中授章を受章されたことが報告され、次いで、定例の理事会が始まった。理事会に出席していつも思うことであるが、これだけ多い議事を割合短時間で審議・処理するのは大変なことである。それは、主に関東在住の久保副会長を中心とする理事の皆さんの常務委員会などにおける事前の審議・準備・議題整理があって可能であることを紹介しておきたい。

我が国では、いずれの学術団体でも同じであるが、最近の学会運営は、会員数の減少と、それに伴う財政の逼迫が深刻である。本会も3~4年前までは同じ状況であったが、他の学会に比較すると、本会の会員数の減少は最も少ないほうであり、また財政的には標準物質の作製と頒布などの事業活動によって改善され、いずれもかなり安定化の傾向にあることは喜ばしいことである。これは、歴代の会長および理事、会員拡充委員会、分析信頼性委員会、技能試験専門委員会等関係の皆様のご努力によるものであることはもちろんであるが、学会会員の多大の支援と協力によることも忘れてはならないと思う。さらに、2004年度から文部科学省の国家プロジェクトとして、先端計測分析技術・機器開発プログラムがスタートしたことも、分析化学並びに日本分析化学会にとって追い風となっている。この点では、二瓶好正元会長、田中耕一氏（島津製作所）のご尽力に感謝しなければならない。このような機会に、本会の活動が活性化され、また分析化学の教育・研究体制が再編・強化されることが望まれる。そのためには、分析化学における人材育成と産官学連携の充実が必要である。理事会ではこのようなことに関する具体的な審議がされたわけではないが、各種委員会報告を聞き、会長の対応を見ていると、今回はそのような雰囲気を感じる理事会であった。

この時期の理事会の重要議題は、秋の年会で表彰が行われる学会賞、奨励賞、学会功労賞、技術功績賞、有功賞に関する審査委員会の報告と、その選考結果の承認である。また、昨年度から新設された「先端分析技術・機器開発賞」が東京コンファレンスで表彰が行われるが、これについても審査結果と表彰式の概要が同賞審査委員会から報告がされた。いずれの賞の審査

結果も、審査委員長と理事による質疑応答の後、問題なく承認された。その選考結果は機関誌「ぶんせき」の8月号で公表されているので、具体的な各賞受賞者名は省略するが、今年度の各賞受賞者も、長年の自己研鑽と努力をされて立派な研究業績をあげられただけでなく、学会活動、社会貢献にも尽力された方々であり、心より敬意と祝意を表する。

さて、今年の第54年会は小生が所属する中部支部の担当であるが、オンライン登録が締め切られた6月5日での総登録件数が850件を超える史上最高の発表件数となったことを、実行委員長として報告し、ご協力に感謝申し上げた。また、一般講演の中から優秀発表賞とポスター賞、また若手ポスター発表の中から若手ポスター賞を選考して、実行委員会表彰を行うこと、パワーポイントによる発表もかなり理解を得ている感触であることなども報告した。また、来年度の分析化学討論会は東北支部、年会は近畿支部の担当であるので、それぞれの支部選出理事から、準備状況について報告があった。

このほかにも、「ぶんせき」、「分析化学」、「Analytical Sciences」の編集委員会、役員等候補者推薦委員会、第1回本部支部連絡会議等の各種委員会の報告がなされた。また、昨今の学会の活動とあり方が問われる学会倫理規定の策定が必要であるとの認識から、木村事務局長から他学会の動向の報告があり、今後本格的に検討することとなった。さらに、個人情報保護法への学会の対応についても、本部、支部の問題として意見交換が行われた。

最後に、分析信頼性協議会の設置が検討されていることを報告しておく。先に、分析信頼性委員会、技能試験専門委員会の活動による事業が学会の財政再建に大きな役割を果たされたことを紹介した。現在、これらの二つの委員会は理事会の下に常置委員会として設置されているが、その活動の拡大と社会的要請に対応するためには、組織強化が必要であることが担当理事から説明された。そこで、関連の小委員会を含めて再編・拡充するために、分析信頼性協議会と、その下に設置する技能試験委員会、標準物質委員会、分析化学技術者教育企画委員会を常置委員会として設置したいとする規定案が提案された。この案件は、学会における学術部門と事業部門のあり方、学会の事業活動の適正化などに関連する重要な問題であるので、短時間の議論・審議で結論を出すのは困難であるとの会長の判断により、次回以降の理事会での継続審議となった。学会活動と組織・事業に関する長中期的視点と計画が必要であるので、今回の会長の判断は適切であったと思う。この問題については今後会員の皆様にも適宜説明をして、理解を得るべきであろう。

〔副会長 原口紘丞〕

## ◆ JAIMA コンファレンス、中日韓環境分析化学 研究シンポジウム報告

分析展併催のJAIMA コンファレンスにおいて「中国・韓国の環境分析と分離分析の最前線」というテーマで9月1日に幕張メッセでシンポジウムを開催した。運営はセパレーションサイエンスを構成するLC・GC・IC・FIA各研究懇談会が合同してあたり、中村 洋東京理科大学教授を大会委員長として